能登半島地震　医療救護支援報告

救急・防災委員会委員長
白鬚橋病院　　院長
石原　哲

全日本病院協会として会員病院支援に出動
－門前町にて医師会支援対策を行う－

出動 会 員 病 院：白鬚橋病院（東京都）・西部総合病院（埼玉県）・日本医大チーム（東京都）・恵寿総合病院（石川県）・相沢病院（長野県）
出動準備会員病院：赤穂中央病院（兵庫県）・加納総合病院（大阪府）・永生病院（東京都）

平成 19 年 3 月 25 日９時４２分　能登半島沖で震度 6 強の地震が発生

地震発生とともに、被害状況の確認を開始。ＡM11 時、出動準備にかかる。西部総合病院（埼玉県）の医師 1 名が白鬚橋病院に合流。会員病院現地調査および周辺支援を目的に白鬚橋病院の救急車 2 台で出動、医師 2 名、看護師２名、救命士 1 名、事務官 2 名の計 7 名で発災当日に現地入りした。

石川県七尾市にて状況把握、会員病院を調査。恵寿総合病院では 35 名の被災者の治療を行っていた。（http://www.keiju.co.jp/news/news_20070329.html）その後、恵寿総合病院理事長のご手配により地域医師会の能登北部医師会長と連絡を取った。門前町地域の家屋倒壊が激しく、避難所は分散していて、飲料水が不足しているとの情報であった。医療については、日赤医療班が到着しているのみで、医師会としての対応に苦慮しているとの情報であった。直ちに門前市に入り門前総合支所で、能登北部医師会会長と合流。巡回診療の依頼を受け、健康福祉課より深夜にかかわらず、医療班の巡回を希望され、巡回開始。門前会館避難所・保健センターと巡回。避難所は深夜にかかわらず、避難された被災者の多くの方々が眠れずに不安な一夜を過ごしていた。地域の医師会の依頼で、巡回診療にきた旨を伝えると、診察を希望する方々が、一人二人と手お上げはじめ、35 名の診察を行った。中には、倒壊した家屋の下敷きになりながら、命さながら何とか避難してきた方もいて、背中には挟まれた後があり、肋骨も折れている様子であった。また、一人のお年寄りは、頭部に大きな挫創があり、出血が止まったので病院には行かず、避難所にいた方もいました。直ちに避難所で縫合処置を行いました。保健センターには、やけどを負った方がいるお聞きし、受傷部位を拝見するとなんと 2 度熱傷範囲は手足全体で８％熱傷の診断。応急処置を行い、直ちに病院へ入院依頼を行い、地元救急隊に搬送していただいた。時刻は AM2:30 であった。いったん門前総合支所にもどり保健福祉課に報告し、AM3:00 保健センターで仮眠に入ったが相次ぐ余震でほとんど眠れず。

平成 19 年 3 月 26 日 AM5 時より巡回開始。消防団の招集のサイレンが町中に響き渡りな

か、門前西小学校避難所・鹿礒集会場避難所を巡回、門前の方々は朝が早く、6 時には、被災者の働き手は作業を開始していた。さらに乗用車内での寝泊まりをした方々が多く、エコノミークラス症候群の危険性を一台ずつ説明して廻った。新聞社の取材にお答えし、危険性を記事にしてもらう。時刻はすでに 7 時。門前総合支所に戻り、状況把握を行う。

門前総合支所での保健福祉課との打ち合わせ予定は 9 時であったが、7 時 30 分から山岸医師会長と佐藤福祉保健課長を中心にミーティングを開始。門前地区医療班本部として門前総合支所を宣言し、すべての医療チームの集合場所と位置付け、周知徹底してもらう。 18 カ所の避難所を巡回する作業を分担すべく、今後、駆けつける医療班の洗い出し、日赤医療斑にも巡回をお願いした。18 カ所をすべての避難者の医療情報を入手する手はずを整え、かけつける医療班が到着を待ち、ミーティングは医師会の先生方の支援について検討を行なった。

門前の医師会の先生方の安否確認が行われ、一人の先生が連絡が付かず、急遽医院を訪ね安否確認を行うこととなった。保健センターの軽自動車に分乗しあわただしく出発。医院の両サイドの家は倒壊していた。緊張した中で、医院の門をたたき、医師会長が、壊れた門を開け、中に入り、先生を呼んだところ、先生、ご夫妻とも無事であることが確認され、医師会長、保健師をはじめ我々も一安心した。

門前総合支所保健福祉課に戻りミーティングを再開。医師会長をはじめ、ほとんどの医院が月曜日から診療を始めるとしており、避難所の皆さんにも広報がされた。我々医寮支援チームの役割は、医師会の先生方の支援であり、被災地内の医療を妨げてはならず、このことを徹底することとした。
8 時 30 分日赤医療班（長岡・金沢・富山）3 斑・日本医大永山チーム 1 斑・白鬚橋病院チーム 2 斑・東京災害医療センター調査斑 1 チーム・金沢大学石川 DMAT1 斑が集合した。すでに、重症者はいないことを確認し、ここに集まったのは地域医師会支援であることを確認。
避難所の傷病者の手当が優先されるのは当然であるが、さらに医療ニーズ調査、衛生環境の把握、不足物資の確認、その他公設以外に避難している状況の確認などが目的であることを確認した。同席した医師会長宅も同日開業に向け自宅に戻ることとし、救護本部は先着した我々が残り医師会長代理として統括班長となり、今後駆けつける医療班の把握、作業分担、集まった救護班の救急車の運用配置などの作業を行った。

巡回の済んでいない避難所を中心に調査開始、チェック項目の共通認識を行い、保健福祉課が急遽作り上げた調査票を配り、遠くの避難所に行くチームには、門前総合支所の職員が同乗することになり、道案内として危険な道路へ迷い込み等無きように安全対策を期した。11 時に再度集合とし、それぞれ巡回に向かった。ビニールハウスに避難している方々が少なくとも 3 カ所いるとの連絡が巡回斑から連絡有り、保健福祉課に伝え、今後の対応を依頼した。

11 時、救護活動および情報収集を終え参集　報告がおこなわれた。
　医薬品等の支援物資が全くない。避難所環境の整備が必要・床に毛布一枚ではかわいそう。眠れない被災者が多い・今後早期にメンタルヘルスケアーが必要。血圧、心疾患等の慢性疾患に対する薬が持ち出せなかった被災者が多い。固定の応急診療所が必要な場所の選定を早急に。ビニールハウスでの私設避難場所があり、明け方冷え込み、すでに風邪症状の患者が発生している。避難所に飲み水や生活用水が不足。自家用車での避難生活をはじめている。などの報告がなされた。
会議では、医師会の意向をふまえ、慢性疾患の薬は、かかりつけ医で処方してもらうこと。風邪薬・打撲ねんざ等の湿布薬・眠剤については、巡回時処方する。眠剤は安易に処方しないこと。避難所にはうがい薬と手指消毒薬の配備をする。車内での避難生活者には、引き続きエコノミー症候群の説明と注意を勧告し、血栓予防のストッキングの支援要請などを行う事を決定。この段階で、我々医療救護のチームは、外傷治療キットが中心で、風邪薬等は手持ちが無く、支援物資もないため、七尾市の恵寿総合病院に現地で不足している医薬品、飲料水などを依頼。
　今回の医療支援は早期に撤退を考え、県内医療機関にその役目を移譲すること。当面初動 1 週間を目途として活動し、2 泊 3 日を基本に班編制を行う。固定の応急救護所は 2 カ所で日赤が担当する。巡回は現時点で 1 斑、その後医療ボランティアの参加が有れば随時巡回場所を指示する事を決定。その後は、4 月 2 日の時点で再検討する事、今後 9 時・17 時を定例のミーティングを行う事、ミーティングには地域医師会長が参加するなどを決定した。
集合時間を 17 時とし再度ミーティングを行うことし、午後は引き続き避難所を中心に活動することを決めた。　能登北部医師会は、県医師会に対し医療救護派遣の依頼をするようお願いし、県医師会長に連絡を行った。

午後になり、新たに駆けつけた、金沢医科大学ＤＭＡＴチーム、恵寿総合病院も参加。恵寿総合病院は、自らも被災地域の病院でありながら、我々の依頼を快く引き受けていただき、不足している物品を調達していただいた。待機した救急車もフル活動であった。避難所や自宅から老人保健施設へ搬送。避難所の急病人を日赤の応急診療救護所に搬送。さらに､慢性透析が受けられない医療機関からの搬送先が輪島対策本部から指定されていたが、個々の患者さんおいては日程調整がつかない被災者もいて、本日中の搬送となった方を指定病院に搬送。また、ビニールハウス内で急病人の搬送の依頼など、あわただしく出動した。
15 時頃、石川県保健衛生部局と県中央病院チームが到着。県内の災害拠点病院が集まる旨を伝えられ、今後の予定を受け、17 時のミーティングにて県中央病院が門前総合支所保健福祉課に設置した医療救護本部の指揮を行うこととし、医師会長了解の元、ミーティングは 18 時に終了。我々救護班は帰路についた。翌 27 日は相沢病院（長野県）の医療チームが合流する事になった。

能登半島地震：門前町内倒壊家屋